

県道美篌・箕輪線拡幅工事事業
—埋蔵文化財包藏地緊急発掘調査報告書—

辻 西 幅 遺 跡

1995. 3

伊那建設事務所
伊那市教育委員会

県道美篤・箕輪線拡幅工事事業
—埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書—

辻 西 幅 遺 跡

1995. 3

伊那建設事務所
伊那市教育委員会

序

今日、各地で、埋蔵文化財、あるいは石造文化財等を含めた文化財保護意識が徐々に定着化するようになってきました。このような動勢のなかで、我が伊那市に於いても、文化財に関連する各種の報告書や冊子を刊行してまいりました。ここ20数年来の傾向として伊那地区にも開発の波が押し寄せ、なかでも顯著なものは土地改良事業、道路開削事業、宅地造成事業等々であり、これらによって埋蔵文化財の調査が生じてまいりました。本来ならば、自然のまま埋蔵しておくのが、最もすばらしい姿ですが、社会状況に対応するために、報告書を刊行して記録保存措置を講じてまいりました。

ここに報告する辻西幅遺跡は県道美篠・箕輪線拡幅事業に該当したので、事業にかかる前に発掘調査を実施し、その成果については、報告書の中に述べられていますが、時間的余裕が無く、充分なる研究、検討がなされなかったことは誠に残念に思います。

発掘調査に当たっては、地元住民の方々、数人の地権者からこころよく全面的な協力を得ることができたので、発掘調査団長に友野良一先生をお願いして調査にとりかかりました。

発掘調査は7月上旬から下旬にわたって実施いたしました。時期が梅雨から夏にわたっていたため、雨や暑さに悩まされたが、ここに調査報告書が発刊されることには誠に喜ばしい次第であります。

最後に、快よく御指導頂いた県教育委員会文化課、並びに伊那建設事務所、連日熱心に調査に当られた調査員、作業員の皆様等に対し深甚なる感謝の意を表する次第であります。

平成7年3月3日

伊那市教育委員会

教育長 宮 下 安 人

例　　言

1. 本書は、平成6年度に実施した県道美鷗・箕輪線拡幅工事事業に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書である。
2. この緊急発掘調査は伊那建設事務所長の委託により伊那市教育委員会が市内遺跡発掘調査団を編成し、この調査団に事業を委託して実施した。
3. 本調査は、平成6年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野良一　飯塚政美

◎図版作製者

・造構及び地形実測図

友野良一	飯塚政美	松島信幸	寺平 宏
・拓影	友野良一	飯塚政美	本田秀明
・土器・陶器実測図		友野良一	飯塚政美
・鉄製品実測図	友野良一	飯塚政美	

◎写真撮影者

・発掘及び造構	友野良一	飯塚政美
・遺物	友野良一	飯塚政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。

6. 出土遺物、造構図及び実測図類は伊那市考古資料館に保管してある。

目 次

序	
例 言	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
図版目次	
第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
(1) 試掘調査日誌	1
(2) 試掘調査結果	2
(3) 発掘調査までの諸手続き	4
第2節 調査の組織	4
第3節 発掘調査日誌	5
第Ⅱ章 遺跡の環境	7
第1節 道路の位置	7
第2節 地形及び周辺の遺跡分布	8
第3節 手良地区の地質	10
第4節 歴史的環境	12
第Ⅲ章 遺構と遺物	15
第1節 調査の概要	17
第2節 遺構と遺物	17
(1) 平安時代の遺構と遺物	17
(2) その他の遺物	30
第Ⅳ章 所見	31

擇 図 目 次

第1図	辻西幅遺跡の位置図	7
第2図	辻西幅遺跡周辺の地形及び遺跡分布図	8
第3図	手良地区地質概界図	10
第4図	辻西幅遺跡周辺の地質柱状図（第3図 × 2地点）	10
第5図	辻西幅遺跡周辺小字名図	13
第6図	地形及び遺構配置図	15
第7図	第1号住居址実測図（上）及び遺物分布図（下）	18
第8図	第1号住居址出土遺物実測図	18
第9図	第2号住居址実測図（上）及びカマド実測図（中）及び遺物分布図（下）	19
第10図	第2号住居址出土遺物実測図	21
第11図	第2号住居址出土遺物実測図	22
第12図	第3号住居址実測図（上）及び遺物分布図（下）	24
第13図	第3号住居址出土遺物実測図	23
第14図	第4号住居址実測図	26
第15図	第4号住居址遺物分布図	26
第16図	第4号住居址出土遺物実測図	27
第17図	第5号住居址実測図（右）及び遺物分布図（左）	27
第18図	第5号住居址出土遺物実測図	28
第19図	第6号住居址実測図（上）及び遺物分布図（下）	29
第20図	第6号住居址出土遺物実測図	30
第21図	鉄鎌実測図	30

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	9
-----	---------	---

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景	図版7	遺物出土状況及び記念撮影
図版2	遺構	図版8	出土遺物
図版3	遺構	図版9	出土遺物
図版4	遺構	図版10	出土遺物
図版5	遺構	図版11	出土遺物
図版6	遺物出土状況		

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

伊那市手良地域は東西に大動脈的な県道美濃・箕輪線が通っている。この道路は以前ならば十分に対応できたが、近年、車社会が手良地域の隅々まで及んでくるに従って、現在の道路幅では交通量に対応できなくなってきた。この問題を解決するには路肩の拡張しか手段がないと察知し、十数年位前から用地買収が完了した地籍は部分的に拡幅がなされてきた。ようやくにして、用地買収が辻集落でも完了するに至ったところ、拡幅部分が辻西幅造跡地に該当することことで、事前協議が行われるようになった。

平成5年9月16日 長野県教育委員会文化課小平指導主事、伊那建設事務所松橋、杉山両担当係、伊那市教育委員会社会教育課林、田中両担当者が合同で現地協議が持たれた。拡幅部分は現道を中心にして南へ2m、北へ2m位とのことで面積は思ったより少な目であった。この時点では埋蔵文化財の有無についての即断は困難であったので、試掘調査を実施した結果で、その対応策を検討するとの指示を受けた。

平成6年4月 伊那建設事務所杉山氏と伊那市教育委員会社会教育課担当職員とで事前協議会を幾度も開き、問題点を指摘しあった。この協議で試掘調査を5月頃に実施したらどうかとのことで意見の一致をみた。

平成6年4月11日付けて埋蔵文化財発掘調査通知を文化庁長官宛て提出する。この通知には試掘調査の旨を記しておいた。

平成6年4月18日付けて市内造跡試掘調査委託契約書を締結する。

平成6年5月13日 関係者各位で最後の現地立合を実施し、分布調査開始に備える。現地の状況からみて試掘調査着手日を来る5月17日と決定した。

(1) 試掘調査日誌

平成6年5月17日 晴 辻西幅造跡現場へ発掘器材を運搬する。

平成6年5月18日 晴 発掘器材を整備し、作業効率を高めるように努めた。

平成6年5月24日 晴 本日よりバックホーを現場の西側（畑地）へ入れ、試掘調査を開始する。この畑で黒い落ち込みが2ヵ所検出され、この付近で、土師器、須恵器、灰釉陶器の破片が相当量出土し、平安時代の堅穴住居址と判明した。一つの住居址からは赤々と焼けた石と焼土の堆積が認められ、カマドの一部と分かった。

平成6年5月25日 晴 本日はバックホーを昨日実施した地区的北側（道路に沿った個所）に入れる。地層は極めて層序順になっていた。昨日、掘り上がった個所を清掃し、写真撮影を終了する。本日の出土品は土師器、須恵器、灰釉陶器であり、トレンチ内より鉄鎌が1本出土



遺跡地の西側へ重機を入れ、試掘調査開始

している。

平成6年5月26日

晴のち曇 遺跡地の東側、道路の南側(山林)へバックホーを入れるが遺物の出土は何もなかった。昨日、調査した個所の清掃をし写真撮影を終了する。山林は松の大木があり、抜

根に手こぎった。この松は年輪から見て50年位はたっていると思われる。

平成6年5月31日 晴 遺跡地の東側(山林地帯)の試掘溝を清掃し、写真撮影完了。遺跡地の西側(畑地帯)の試掘溝(道路に面した所)を清掃し、写真撮影を済ませる。

平成6年6月1日付けて伊那市長唐澤茂人から伊那建設事務所長宛に試掘調査完了報告書を



作業員による試掘溝の清掃(東側山林地帯)

提出する。この報告書に記述された項目及びそれに関連する内容は次の通りであった。

・発掘調査地区 - 伊那市大字手良沢岡・遺跡名 - 辻西幅遺跡・完了年月日 - 平成6年5月31日・調査概要・出土遺物(名称 時代 数)

(2) 試掘調査結果

5月17日から5月31日までの延6日間試掘調査を実施し、その結果、平安時代2軒の竪穴住居址を検出した。これらの遺構とともに平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器が相当量、平安時代鐵鎌1点が発見され、辻西幅遺跡のおおよその範囲を確認するに至った。この結果を踏まえて伊那市教育委員会では本格的な発掘調査の必要性を強く提唱した。

県道拡幅の早期着工、使用が切望されている今となつては遺跡の現状保護は到底不可能な状況であるとの考えを調査團側に提示し、理解を求めるように懸命に努力した。その結果、後述するように順調に発掘調査実施への歩を進めていった。(飯塚政美)



遺跡地の西側（畠地帯）北半分試掘調査完了



遺跡地の東側（山林地帯）の試掘調査完了



平安時代堅穴住居址の覆土上層面

平安時代堅穴住居址の覆土上層面
(カマドに使用した石が見える)



（3） 発掘調査までの諸手続き

先の項で記述したように試掘調査の結果から、本格的な発掘調査が必要となり、調査に必要な諸手続きを始める。

平成6年6月7日 伊那建設事務所長より伊那市長宛に発掘調査計画書、発掘調査見積書の提出依頼がある。

平成6年6月9日 伊那建設事務所長より文化庁長官宛に文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知を提出する。

平成6年6月10日 伊那市長より発掘調査計画書、発掘調査見積書の提出をする。

平成6年6月21日 埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を伊那建設事務所長唐澤行雄、伊那市長唐澤茂人両者間で締結する。

平成6年6月23日 伊那市長唐澤茂人、伊那市教育委員会内市内遺跡発掘調査団長友野良一と埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかり万全を期した。

第2節 調査の組織

試掘調査結果については、用地内全域にわたって比較的遺構・遺物が集中的に確認され、平安時代の生活痕跡が存在した旨を報告した。この報告を聞いた伊那市教育委員会では市教育委員会を中心にして、辻西幅遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を行うことにした。

辻西幅遺跡発掘調査会

伊那市教育委員会

委員長 小田切 仁

委員長代理 小坂栄一

委員 岸 敏子

〃 小松光男

教育長 宮下安人

教育次長 有賀博行

調査事務局

社会教育課長 新井良二

社会教育係長 林俊宏

青少年教育係長 大久保律子

社会教育係 飯塚政美

〃 有賀恵

発掘調査団

団長 友野 良一 (日本考古学協会会員)

調査員 飯塚 政美 ("")

" 本田 秀明 (長野県考古学会会員)

" 松島 信幸 (第四紀学会会員)

" 寺平 宏 ("")

発掘作業員 柴佐一郎 大久保富美子 有賀秀子 酒井とし子 小田切守正
小松栄子 和田武夫 小松孝臣 (敬称略順不同)

第3節 発掘調査日誌

平成6年7月1日 雨時々曇 梅雨の時期であり、雨降りでも作業が出来るように遺構の上にテントを建てた。試掘調査で検出された2軒の住居址を第1号住居址、第2号住居址と命名し、第2号住居址より掘り始める。カマド周辺から土師器、灰釉陶器片多数出土。高台付土師器甌の完型品が出土し、みんな大いに驚き、今後の発掘調査に期待が沸いた。

平成6年7月4日 晴 第1号住居址、第2号住居址の掘り下げを続行する。第2号住居址から完型品に近い土師器、灰釉陶器が数点出土し、ドットマップを実施して取り上げ、さらに覆土層を掘る。本日は30度を超す暑い1日であった。第1号住居址から少片の土師器、須恵器が相当量出土。遺跡地の東側(森林地帯)へバックホーを入れ、掘り下げていくと方形状の落ち込みが見られ、形態からして住居址と判別し、第3号住居址と名付ける。

平成6年7月5日 晴 第1号住居址、第2号住居址の掘り下げを完了し、直ちに2軒の住居址の床面直上、床面上の遺物ドットマップを実施した。第3号住居址のプラン確認を終了。

平成6年7月6日 晴 第1号住居址、第2号住居址の遺物ドットマップ図の再点検と整理を行い、出土状況、出土層位の把握に努める。第2住居址カマドの断面カットをして、セクション面を整備。第3号住居址を発掘するが、遺物の出土量は少なかった。

平成6年7月7日 曇時々雨 第2号住居址カマドの平面、断面実測を終わらせる。

平成6年7月11日 第1号住居址の平面、断面実測終了。セクション図の作成。第1号住居址、第2号住



発掘風景（第6号住居址）

居址、第2号住居址カマドの写真撮影を終了する。第3号住居址内出土遺物ドットマップ図を作成する。第3号住居址の東隣りに落ち込みが発見され、落ち込み具合が住居址の形態を有していたので第4号住居址と名付け、バックホーにて耕土剥ぎを施し、平面プランを確認。午後3時過ぎから掘り下げに手をつけ出す。

平成6年7月13日 晴 第3号住居址覆土セクション図作製。同住居址の平面、断面実測終了。第3号住居址カマドのカッティングを終了し、図面を作成。第4号住居址の掘り下げをほぼ完了させ、同時に遺物ドットマップを測定する。

平成6年7月14日 晴 第4号住居址内の柱穴、南壁に接した2ヵ所の柱穴を掘り下げる。道路を隔てた北側の山林にバックホーを入れて地層を精査すると、最も西側に寄った位置に方形の落ち込みを発見し、第5号住居址とする。

平成6年7月15日 晴 第4号住居址のカマド付近を掘り下げていると、「王」字を印した墨書頸器環が正位の状態で出土した。休憩用として建ててあったテントを東側へ移転する。今までテントを建ててあった場所をバックホーにて掘り下げると黒土の落ち込みが顕著に判明し、これを第6号住居址と名を付ける。

平成6年7月18日 晴時々雨 第4号住居址カマドのカッティングを行い、その平面、断面図それぞれつくり上げ、本住居址の全体把握できるようになった。第6号住居址のプランが明瞭化し、掘り下げを進め、カキ目文様の土師器、刀子2点が出土した。本住居址の覆土中の遺物ドットマップ図を作り上げる。

平成6年7月19日 晴 第5号住居址の一部プランが確認でき、掘り下げを始め、遺物ドットマップがとれるように段取りをして、遺物をビニール袋に入れて、その位置に建てておく。第6号住居址の中央部に東西にベルトを残し、その他は完掘を終了する。

平成6年7月20日 晴 第6号住居址を完掘し、写真撮影、実測を終了。同址カマドのカッティングを終え、実測を済ませる。

平成6年7月21日 晴 第5号住居址のドットマップを終え、完掘、清掃、写真撮影、実測図作成作業をとどこおりなく済ませる。

平成6年7月22日 晴 全測図作成を終了。現場の道具類、テントの撤収を実施する。

平成6年7月24日 晴 午後現場説明会を開催。多くの人参加する。

平成6年9月～平成7年3月 報告書作成用整理作業、報告書刊行。(飯塚政美)



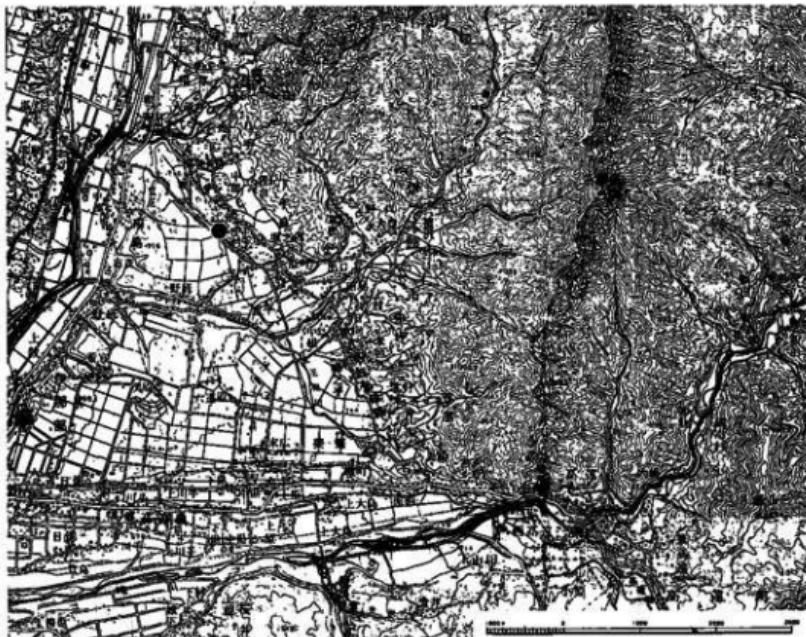
現場説明会開催（平成6年7月24日実施）

第II章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

辻西幅遺跡は長野県伊那市大字手良沢岡地籍辻集落の東方部一帯に広がりをもっている。遺跡地に至る道順は凡そ三方向に限定されるであろう。第一はJR飯田線伊那北駅で下車して東進し、天竜川を渡り、主要地方道伊那・辰野線（通称竜東線）を長野方向へ約6km北進し、卯の木交差点を右折して県道美鷹・箕輪線に入り、東方へ1km位進むと辻集落の大きな三叉路に着く、この周辺一帯が遺跡地の中心地であろう。

第二の道順は途中まで第一の道程と同様である。伊那・辰野線（通称竜東線）を辰野方向へ約4.5km進み、野底集落の北はずれ、伊那北保育所近くの三叉路を右折して、市道野底・手良線を東進する。進み始めてすぐに棚沢川を渡り、しばらく行くと、右手に野底堤が見られ水を満々と湛えている。この堤から東へ500m程行くと又、三叉路に直面するが、左折して勾配の急な所を登っていく。登りつめると眼前に福島・手良地籍の大水田地帯が広がり、秋ともなれば稻穂



第1図 辻西幅遺跡の位置図 (1 : 75,000)

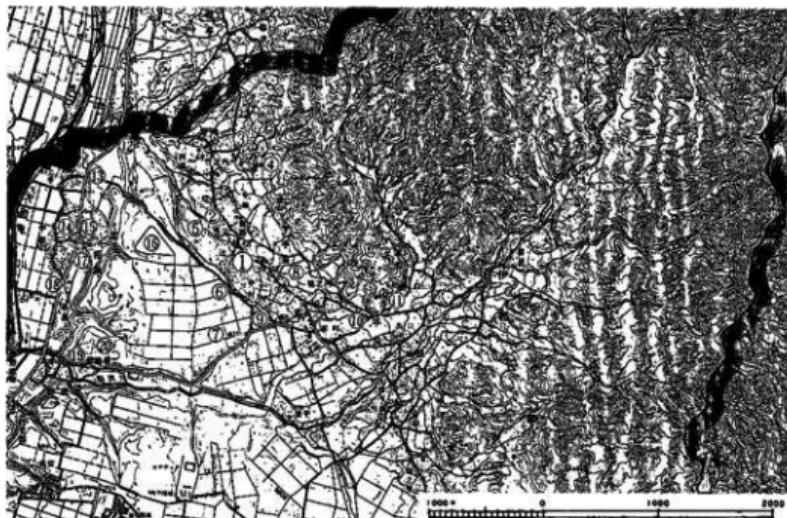
の波が目を楽しませてくれる。水田地帯を左手に見て、北へ1km程行くと辻集落に到達する。

第3の道順は伊那市街地より東へ杖突街道を高遠町方面へ約5km行くと、近年住宅化が激化している美篶上原集落に至る。上原集落と上大島集落の境界付近で杖突街道と別れて左に折れ北へ向かうとすぐに左に美篶小学校舎が見える。小学校のすぐ北側は三峰川右岸第二段丘が東西に走り、段丘崖には見事な疊層やチフラ層が厚く堆積し、地質学研究にはかっこうな場所である。段丘斜面の山林地帯を登れば広々とした平坦地が続く、この平坦地は、以前、畠地や森林であったが、三峰川総合開発時に、引水として、水田化した。末広集落を通過し、杖突街道分岐点から約2.5kmで手良中坪集落に至る。中坪に祭つてある八幡社の前で左折して県道美篶・箕輪線を西進し、約2kmで手良地区の中心地に及ぶ。この地区には伊那市役所手良支所、手良郵便局、手良小学校、手良保育所、手良土地改良区事務所が棟を並べて建っている。手良の中心地から西方へ約1km行った付近が辻西幅遺跡に該当する。

第2節 地形及び周辺の遺跡分布

1. 地形

辻西幅遺跡の存在する付近の地形は東西の方向から三峰川によって形成された台地である。三峰川の源流は南アルプスにあり、数多くの小河川を集めて、最終的に天竜川に合流する。



第2図 辻西幅遺跡周辺の地形及び遺跡分布図 (1 : 50,000)

沢岡川、瀬沢川、八ツ手川によって再侵食されてできた複雑多岐にわたる小段丘地形をつくっている。造跡地の北側と南側には湿地帯が広い範囲であり、かつては湧水が多量にあったと想定される。従って、造跡地周辺の水田は沼田状の景観を呈し、耕土は黒々として肥沃であった。これらの水田は大部分圃場整備され、近代化農業が進展しつつあった。

2. 周辺遺跡の分布

本造跡を中心とした周辺造跡には、縄文時代早期～江戸時代に至るまでの各種各様な造跡が存在している。これらを時代幅で考えてみると約1万年の数値に達しよう。

第1表にその一覧表を掲示したが、内容項目は造跡名、所在地、地形、時期であった。Noについては第2図 辻西幅造跡周辺の地形及び造跡分布図内の番号とは一致している。時期については土器編年を採用して記述した。

辻西幅造跡周辺の造跡発掘調査は過去、島崎造跡（第1次～第2次）、堤林造跡、山の田造跡、鍛冶垣外造跡でそれぞれ実施された。これらの調査は圃場整備事業実施前に行う緊急発掘調査であり、日程、予算面で大いに制約があった。

前述した4造跡の発掘調査成果については第4節 歴史的環境のところで触れるので、今回は省略しておこう。

造跡の分布状況を概観してみると、瀬沢川、八ツ手川、沢岡川等々大小河川によって形成された河川段丘面上に存在している場合が多く、山麓扇状地面上の造跡存在性は低い。これは水の問題が密接に関連しているかと想定される。（飯塚政美）

No.	造跡名	所在地	地形	時期
1	辻 西 幅	手良沢岡	扇状地上	平安時代土師器 平安時代 須恵器 平安時代灰釉陶器
2	島 崎	手良八ツ手	台 地 上	平出3A 井戸尻 曾利 中島式 中世陶磁器類 近世陶磁器類 中世内耳土器
3	堤 林	"	扇状地上	大洞A 横王 平安時代土 師器 永樂通宝、中世陶磁 器類 近世陶磁器類
4	山 の 田	"	山 麓 上	横円押型文 織ヶ鳥吉 子 母口 製久保 非戸尻 曾 利 水神平II 平安時代土 師器 平安時代須恵器
5	中 原	"	扇状地上	中島 平安時代土師器 平 安時代須恵器 平安時代灰 釉陶器
6	垣 外	手良下手良	平 地 上	曾利
7	松太郎塙	"	扇状地上	横円押型文 曾利 平安時 代土師器 平安時代灰釉陶 器
8	角 城	"	台 地 上	平安時代須恵器
9	南 垣 外	"	"	"
10	鍛冶垣外	手良野口	扇状地上	曾利 堀之内 中島 平安 時代土師器 平安時代灰釉 陶器 平安時代須恵器 中 世陶磁器類
11	古 八 塙	"	山 麓 上	中島
12	南 原	福 島	段 丘 上	曾利 堀之内 平安時代土 師器 平安時代灰釉陶器 平安時代須恵器
13	大 上 平	"	"	平安時代土師器 平安時代 須恵器 平安時代灰釉陶器
14	福島上平Ⅰ	"	"	"
15	福島上平Ⅱ	"	"	平安時代土師器 平安時代 須恵器、平安時代灰釉陶器
16	池 火 平	"	"	曾利 中島 平安時代土師 器 平安時代須恵器 平安 時代灰釉陶器
17	福島上平Ⅲ	"	"	平安時代土師器 平安時代 須恵器 平安時代灰釉陶器
18	福島上平Ⅳ	"	"	"
19	福島古墳群	"	"	横穴式石室 円墳 8基
20	原	"	"	曾利

第1表 周辺遺跡一覧表

第3節 手良地区の地質

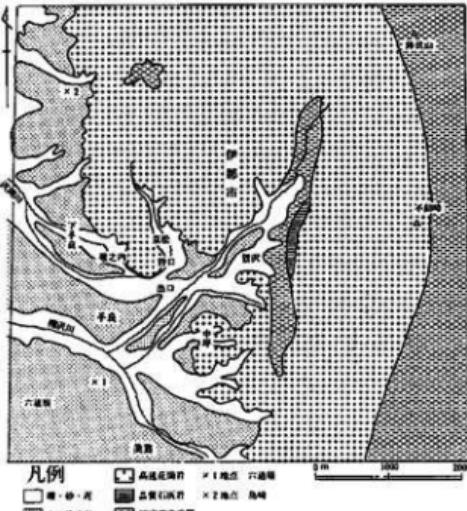
1. 手良地区周辺の地質

手良地域は、六道原扇状地の三峰川麓部一帯に含まれている。東部山地は領家変成岩帶の高遠花崗岩より成り、不動峠(1374m)と鉢伏山(1456m)を結ぶ伊那市と高遠町の分水嶺から高遠寄りは、領家変成岩である。また、この変成岩類は手良地区の最奥地蟹沢の東方にも高遠花崗岩に囲まれて南北に細長く分布している。この地域に分布している領家変成岩類は、古生代及び中生代に海底に堆積した砂や泥を主とする堆積物が、広域変成作用を受け雲母片岩や黒雲母片麻岩に変化したものである。

また、これらの変成岩は、中生代末から新生代古第三紀にかけて貫入した高遠花崗岩によって接触変成作用を受け、花崗岩の周辺部では黄青石ホルンフェルス等を含む接触変成体を形成している。

手良地域と六道原地域の境を成している大きな川として棚沢川の支流である土王田川があげられよう。この川の源は高遠花崗岩が岩相の主流を成している笠原地籍であり、この一帯での流れは急である。

土王田川両岸は比高数mにわたる河岸段丘を形成し、この面は美事な水田地帯が展開している。



第3図 手良地区地質概界図



凡 例

(柱状図) ■ 鹿島・黒褐色土 ◻ ◻ ◻ 石混リテラフ ◻ ◻ ◻ 硅
 (鉱 物) hy : しそ卵石, bl : 黒雲母, mu : 白雲母, mg : 雄
 鉄鉱, qz : 石英, f : 長石などの鉱物が含まれている。
 (火山ガラス) bw : バブル型火山ガラス, Pm : 岩石型火山ガラ
 ス、火山ガラス含有量 0~10%以上 - 10%以下

第4図 汗西幅道跡周辺の地質柱状図

(第3図 × 2地点)

2. 手良地区の段丘

この地域は大きく見れば伊那市東部地域、ややめば見て見れば三峰川右岸地域に属している三峰川によって造り出された六道原扇状地と、棚沢川あるいはその支流などの小河川によって形成された扇状地の接点に位置し、更に、その扇状地を棚沢川、沢岡川、その他の小河川が再侵食して複雑多岐にわたる見事な段丘状地形を成している。

1987年に第3図の×1地点で大春化学工業所により白土採掘のため、深い豊穴が掘られた。この地点では、六道原扇状地の礫層の上に約8万年前に降下し、堆積した御岳第1浮石層(pm-1)が乗っている。

pm-1とはカオリンナイト、ペントナイトとも呼ばれている。御岳火山に起因し、木曾御岳火山活動史で第二期活動期に当たり、降灰したものが堆積し、のちに粘土化したものである。採掘したばかりはペトペトしている。乾燥すると、初めは堅いが放置しておくと白色の粉末となる。黄色のものは多孔質で、纖維状を呈する。乾燥すると量は半減し、手でもむと粉になり黄色味がなくなる。湿気を帯びるとまた黄色を成す。

白土からはアルミナをつくり、みょうばんや、印刷用インキの製造、カオリンからは陶器の原料、セメントの材料、製紙、製薬、化粧品等である。カオリンはアート紙の表面につや出し用に塗りつけている。

pm-1の上部にはそれ以後に降下した軽石や火山灰が覆っている。従って、この面が形成され、段丘化した年代はpm-1の軽石が降下した8万年前よりも以前のおよそ10万年前頃である。第3図の中位段丘面はおそらくこの時代か、或はやや後に離水して段丘化状に走ったものと思われる。

3. 辻西幅遺跡の地質

第3図手良地区地質概界図×2地点での地質調査坑の観察結果により述べていく。この調査地区は辻西幅遺跡と接した地点であり、好都合であった。観察結果によれば、この面上では軽石や火山灰層の存在はなかった。礫層の上に厚さ2mの砂混じりテフラ層が堆積し、やや秩序が保たれていた。礫層を構成する種類は砂岩・粘板岩・緑色岩を主とする5~20cmの亜円礫で風化の進化度は顕著であった。これらの礫は東方の山地に存在する領家帶の岩石ではなく、中央構造線よりもさらに東方の三峰川帯、秩父帯、四十萬帯から運ばれてきたものであり三峰川の扇状地礫層と想定される。

砂層を構成する砂粒は黒雲母・白雲母・石英・長石の他に磁鐵鉱、しそ輝石等が混入する。これらの鉱物は火山起源のものではなく、東方山地の領家帶の岩石を含んだ鉱物であり、主として沢岡川の上流の東松方面から流水によって運ばれて堆積したものと考えられる。砂層の上部から下部にかけて姶良Tn火山灰(九州鹿児島湾の姶良カルデラから約25,000年前に飛来した火山灰。略称AT)の火山ガラスと形態が同じ火山ガラスがわずかではあるが含まれている。おそらく二次的に移動してきて混入したものと思われる。(松島信幸 寺平 宏)

第4節 歴史的環境

伊那市東部地域に含まれている手良地区は天竜川左岸河成段丘と、天竜川主要支流の1つである棚沢川や三峰川の活動によって形成された段丘面をベースにして、その上に東側山麓地帯より流出した土砂を集積して広大な扇状地面をつくり出した。扇状地形形成活動が終わった後に厚いテフラ層が覆っており、その上に、さらに安定した土壤が堆積している。

前述した地理的・地形的・地質的な背景を基盤にして八ツ手地籍の歴史はくりひろげられてきたのである。前書はこのあたりでとどめ、次に本論である歴史的環境に踏み入っていく。八ツ手地籍に入間の営みが開始されたのは現在、分かっているかぎりでは山の田遺跡出土の縄文早期楕円押型文土器（約8000年前）が最古である。また、同遺跡から縄文早期末葉で貝殻糸痕文に主特徴を持つ茅山式土器、縄文中期初頭の梨久保式土器、中期中葉の井戸尻式土器、中期後葉の曾利式土器の出土が過去の発掘調査報告書に掲載されている。

弥生時代に入り、天竜川水系を遡って稲作農耕文化をたずさえた水神平式土器文化が伊那谷へ波及してくる。この文化を実証する土器片が前述した山の田遺跡から出土している。当時は湿田が多く、沢水が集まる場所に田をこしらえたのであろう。この遺跡は標高が760m近くあり、近年、問題になってきている弥生時代高地性集落の草分け的存在ではないだろうか。当然ながら畑作農耕も盛んに実施したことと思われる。

古墳時代に入り、八ツ手集落から瀬戸川を隔てた対岸には六ツ塚古墳の残骸が見受けられ、さらに、天竜川左岸段丘突端部に数多くの古墳群が列状に存在している。現在、八ツ手地籍内には古墳時代集落址の発見は認められていないが、近在の古墳群からみて、いつかは発見されるに相違ないと思われる。

平安時代承平5年（935）に編纂された倭名類聚録には「豆良郷」なる名が最初に見られる。「豆良」の由来については「豆良公」と称する帰化人が中坪の奥地滝の沢川上流に住んでいたと伝承されている。この地は大百済毛、小百済毛と呼ばれている。この説については諸説が提唱されているが、まだ決め手になるのは出ていない。南垣外遺跡から灰釉長頸瓶と人骨の出土が伝えられており、さらにこの南垣外から棚沢川に沿って広大な平坦面が展開し、この西端部がかの有名な福島遺跡である。近年の研究から福島遺跡は豆良郷に含まれていると定説化づけられている現状であるが、さらに、今後の研究が重大な課題となろう。鍛冶垣外遺跡からも平安時代の造構・遺物の検出が報告書によって知らされるようになった。

昭和60年度の発掘調査によって、堤林・島崎両遺跡から中世陶磁器類が相当量出土した。前者の遺跡出土遺物は次の通りである。古瀬戸灰釉四耳壺（15世紀）、古瀬戸鉄釉模皿（16世紀前半）、永樂通宝（1枚）。後者の遺跡出土遺物は次の通りである。中津川大平鉢（13世紀）、中国元白磁碗（13世紀）、中国明白磁碗（15世紀）、中国明青磁碗（15世紀）、古瀬戸灰釉大盤（15世紀後半）、古瀬戸鉄釉模鉢（16世紀前半）、古瀬戸灰釉皿（16世紀中葉）、古瀬戸灰釉丸皿（16世



第5図 辻西幅瀬川周辺小字各圖

紀前半）、古瀬戸鉄釉甕（16世紀）

以上の事実からして鎌倉前期から戦国時代にかけて城館を中心にして農村集落の営みが確証づけられる。中国青磁・白磁類は伯来の高級品で、近くにある小松の城、登内の城との関連性を強く示唆するものである。一方、太平鉢、摺鉢、大盤、皿、丸皿、甕等々の日常雑器類は中世農村集落の繁栄を意図するものであろう。

近世に入り、手良地区は天領に含まれ、代官は千村氏が統治していた。千村氏の屋敷は岐阜県可児市久々利にあり、陶器類が地域的に見て安易に入手したのであろう。従って、島崎遺跡より多量の「瀬戸物」が出土し、このことを物語っている。陶器類の優品は17世紀代では瀬戸鉄釉摺鉢、志野長石釉皿、18世紀代では瀬戸灰釉細筒形三足香炉³、瀬戸御深井釉茶碗、瀬戸灰釉こね鉢、瀬戸灰釉甕、19世紀代では瀬戸鉄釉燈明受皿、瀬戸鉄釉茶碗、瀬戸染付茶碗、伊万里雪輪文茶碗、瀬戸灰釉香炉⁴、志野長石絵瀬戸等々が検出され、江戸時代全般にわたって農村が豊かであっただろう。

最後になるが、辻西幅遺跡周辺の小字名を列記し、その由来について記しておく。

今回発掘調査を実施した本遺跡周辺の小字名は西垣外と呼ばれている。遺跡地の周辺にはかつてその経済基盤が農業に依存していたと思われる荒田、中田、二反田、フサイ田、清水田、塚田、前田、打田、角田、杏田、久保田、堤田、餅田、柳田、箕輪田、九畠、角畠、ハンナワ畠、辻畠等々の小字名が現存している。

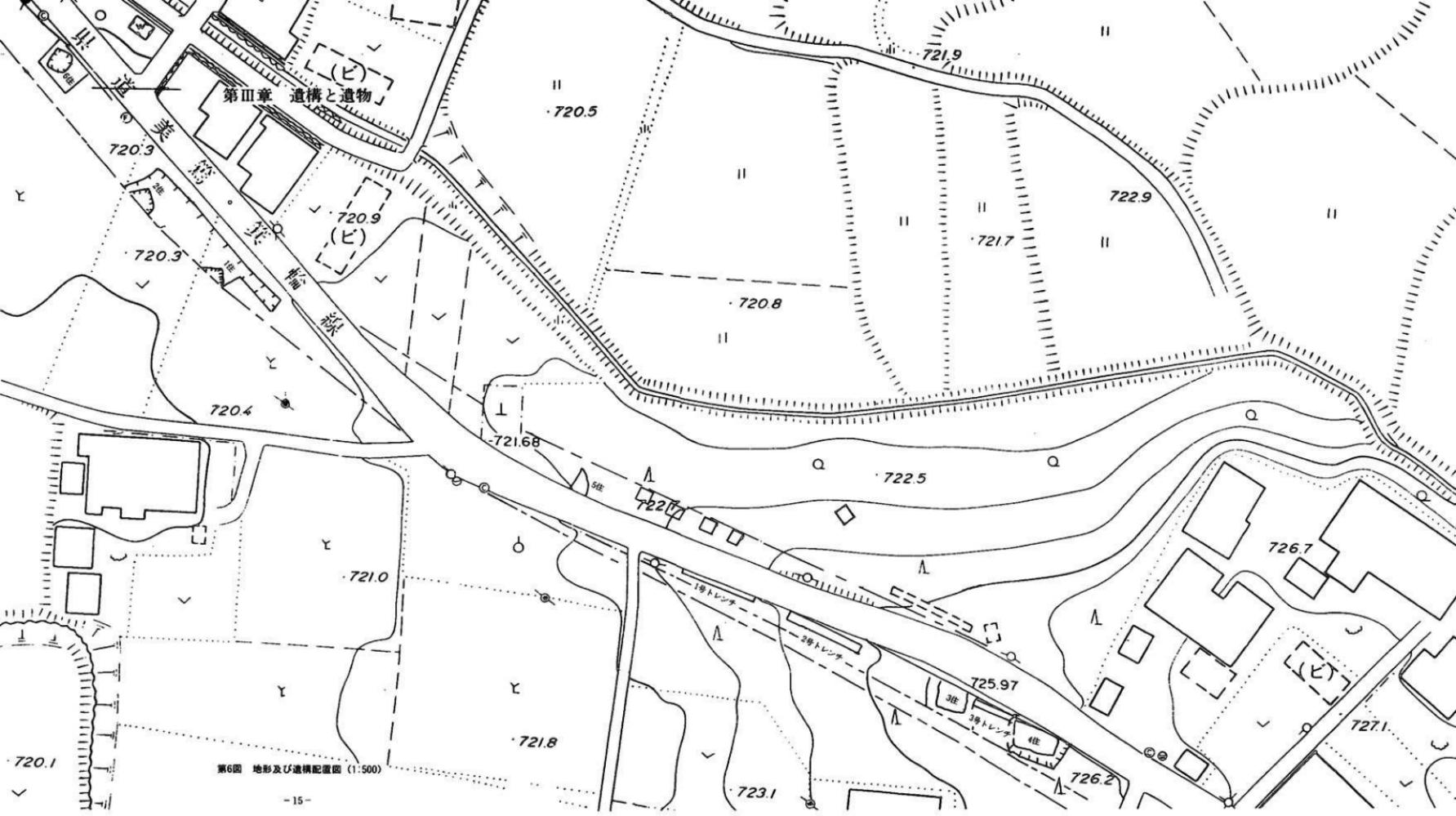
南垣外、西垣外、北垣外、垣外等があり、極く一般的であるが、中世土豪の支配地域界がある程度可能となりつつある。この地域を統治した中世土豪の城館はどこにあったのであろうか。発掘調査地点から北へ1km程行くと「古城」名の小字名が見られ、そこは大きな沢を巧みに利用して築いた館となっている。この一帯は前述した小松の城と呼ばれ、小松姓の一族が屋敷を構えている。この城郭内には堀と段が現存している。

左に掲示した写真は下手良大日堂東側境内地に建てられている近世の五輪塔群である。
火輪の軒公配、地輪の縦長状況から見て、江戸時代の建立と想定できよう。

(飯塚政美)



近世の五輪塔群



第6図 地形及び遺構配置図 (1:500)

第1節 調査の概要

辻西幅道路の土地利用状況は畠地・山林・水田地帯となっている。今回の調査は県道美篶・箕輪線の拡幅工事事業に伴う理由により、その調査面積は限られていた。従って、前述してあるように分布調査を実施し、その結果に基づき本調査にとりかかった。

調査の結果、西側地区では平安時代竪穴住居址3軒、東側地区では平安時代竪穴住居址3軒、合計6軒が検出された。これらの住居址は前述したように限定された範囲での調査のため、完掘できたのは第6号住居址1軒のみであった。その他、5軒の住居址の調査面積内訳は次の通りである。半分位調査のできた住居址－第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址。四分の一一位調査のできた住居址－第1号住居址、第5号住居址。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製刀子、鐵鎌が出土した。これらの詳細な内容については後述してある。

出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器等が主体で、概ね、平安時代10～11世紀代に属するものと考えられる。土師器は碗・杯・甕で、ロクロ痕がそのまま残るものが多い。須恵器は大きく外反するものは少なく、ロクロ痕が残る粗製品である。灰釉陶器は体部の張りも、比較的弱形態、高台は三日月形、灰釉は刷毛塗などから坦窯90号窯と考えるもの。高台が低く、回転糸切痕をそのまま残している形態などから折戸53号窯期に属するものと考えられるものである。

第2節 遺構と遺物

(1) 平安時代の遺構と遺物

第1号住居址（第7図 図版2）

本址は県道美篶・箕輪線現道の南側、調査地区西側の畠地内に検出され、西側に第2号住居址がある。掘り込み面は表土層面から60cm位下ったテフラ層を掘り込んだ竪穴住居址で、平面プランは南側が用地外のため調査ができず、その全体は把握できないが、検出された一隅から想定して隅丸方形状を呈すると思われる。

規模は全面的な調査ができなかつたため測定不可能、従ってその数値が算出できなかつた。壁高は検出された北壁で35cm位、東壁で45cm位をそれぞれ測定でき、壁高としては普通の高さであった。両壁面ともに外傾気味で若干凹凸があり、やや堅かつた。

柱穴らしきものが、東壁面に接して発見されたが、住居址の全体像が把握できなかつたためその実態は不明である。床面は北東の一隅を除いて全般的にかたい叩きとなつておらず、ほぼ水平であった。北壁直下に幅13cm位、深さ10cm位の周溝があつておらず、どこまでその広がりをもつかは不明である。

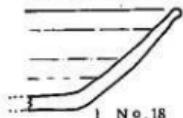
本址の発見された付近の地層面は上から順に次のようになつておる。黒土層（耕土）、ブロック混り黒土層、黒褐色土層、ブロック混り赤褐色土層、テフラ層。

土師器、須恵器からみて、平安時代後期住居址である。当然ながらカマドの存在はあるが、前述した理由によりその位置は不明である。

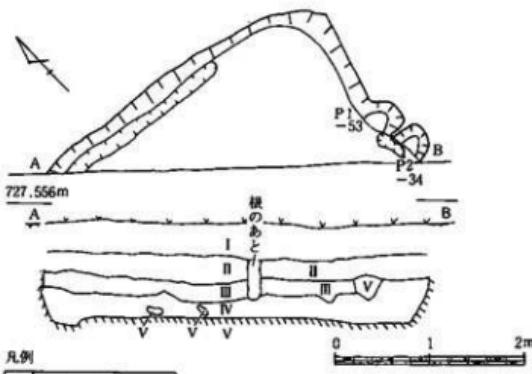
遺物（第8図）

胴部が外方に直線的に立ち上る須恵器無高台碗。灰黑色を呈し、口径約15cm、高さ3.4cmを測る。内、外面にロクロ痕が認められる。胎土に長石粒を含んでいる。

産地は不明である。



第8図 第1号住居址出土遺物実測図(1:2)

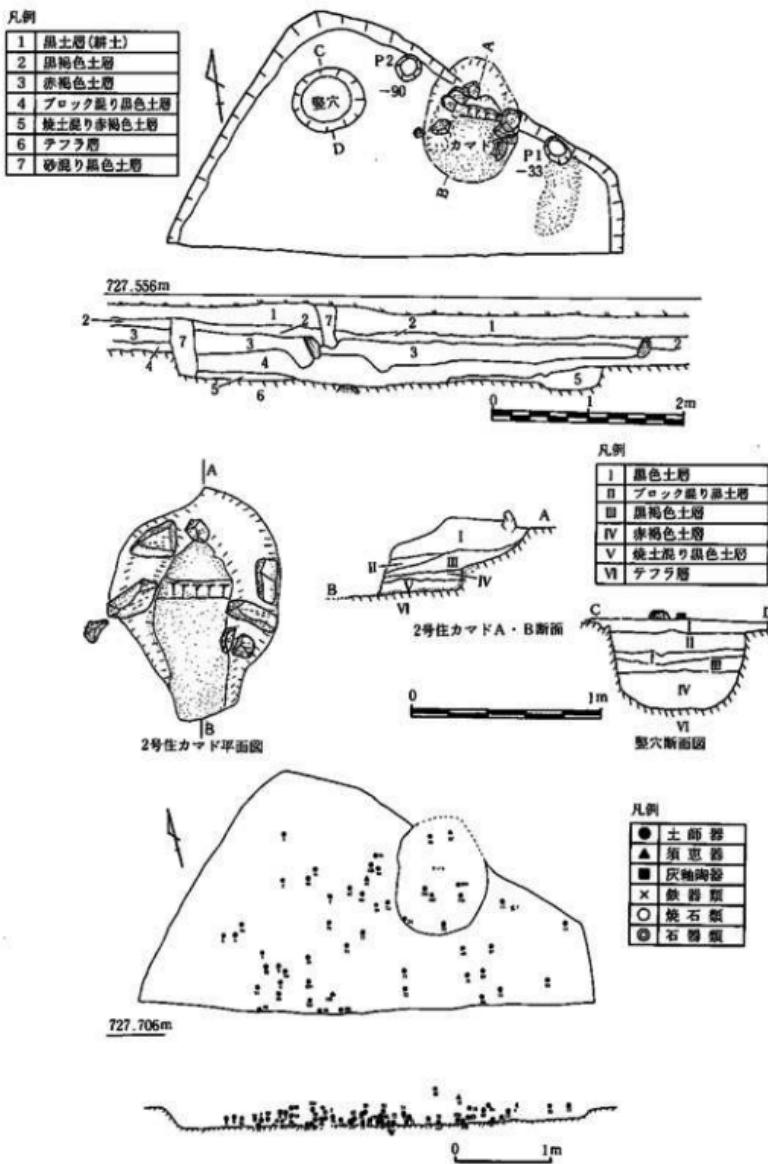


第7図 第1号住居址実測図(上)及び遺物分布図(下)

第2号住居址(第9図 図版2-5)

本址は東側で第1号住居址、西側で第6号住居址にはさまれるような位置に発見された。南側は道路拡幅用地外の為調査不可能。テフラ層を掘り込んで構築され、二隅の状態からみて、隅九方形状の平面プランを呈する竪穴住居址である。遺構は東西4m40cm位、(南北は用地外のため不明)を測る。当然ながら東西規模の数値からみて南北規模の大般は想定でき得る。一边4m前後とは極く普通の部類に属している。

壁高は20~25cm位とやや低めであり、外傾気味を呈し、堅めであった。床面はやや凹凸が確認されたが、全面に堅い叩きが及んでいた。柱穴はカマドを境にして東・西側に1本づつ検出され、直径が25~32cm位、深さ33~90cm位を測る。北西隅の近くに直径65cm、深さ80cm位の円形状の竪穴が発見されたが、カマドとの位置関係、遺物の出土状況からみて、貯蔵穴的色彩が



第9図 第2号住居址実測図(上) 及びカマド実測図(中) 及び遺物分布図(下)

強いのではないか。

カマドは北壁中央部付近にあり、石組粘土カマドの形態を成しており、その構築に使用されたのは花崗岩、变成岩が主流であった。焚口及びその近くは赤々と変色した焼土塊が多量に堆積しており、カマドの隆盛が想われる。袖石の配列は東・西側ともにやや内傾していた。

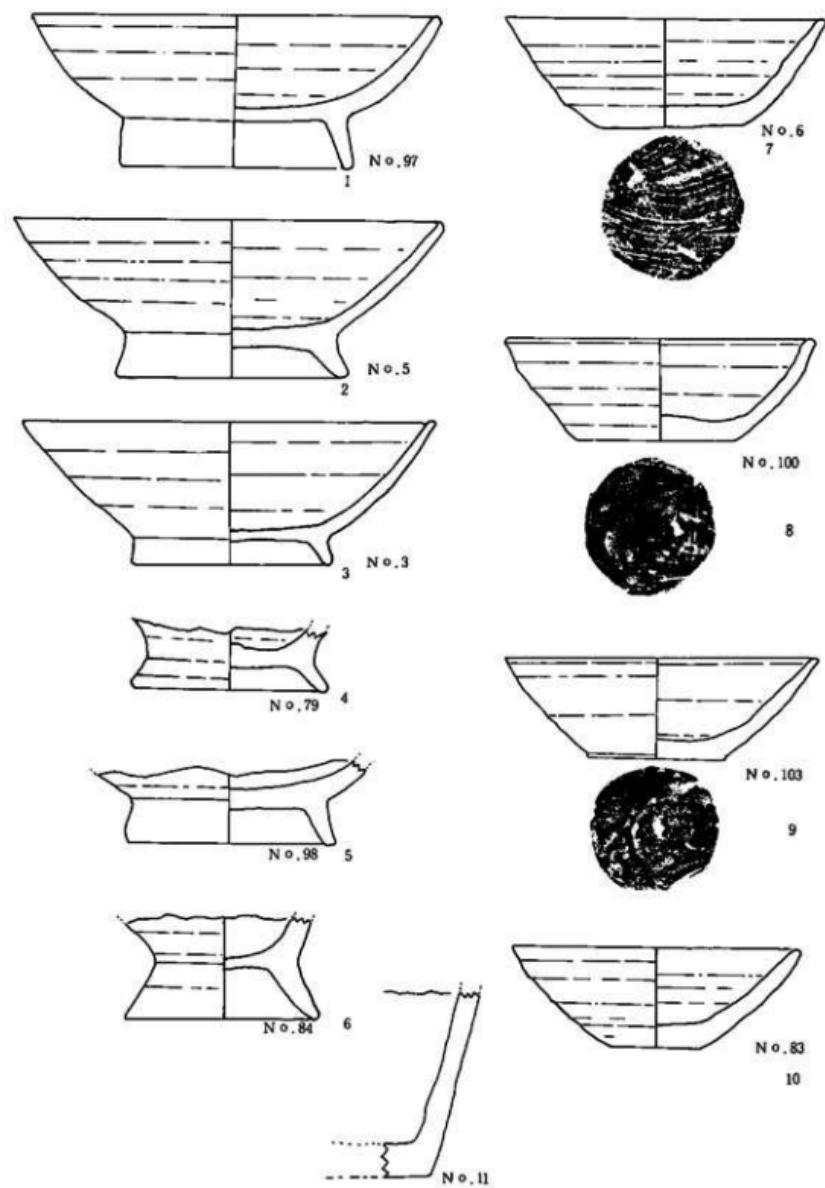
豊穴を中心にして周辺に土師器高台付碗が正立や倒立状態で出土した。以上、述べてきた事柄からして本址は平安時代後期の住居址である。(飯塚政美)

遺物 (第10~11図 図版8~11)

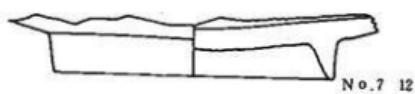
第10図の1は土師器碗で、口径14.3cm、高さ5cmを測る。胴部に張りがあって、立ち上がる形を成し、高台は三日月形に外反し、底部及び内側にロクロ痕が残る。赤褐色を呈し、胎土中に長石粒が目立つ。2は土師器碗で口径15cm、高さ5.4cmを有する。胴部に張りがあり、口縁部にかけわざながら内窯して立ち上る。全面にロクロ痕調整が認められ、特に底部内面には切りばなしのロクロ痕が残り、付高台は三日月形に張り出している。3は土師器碗で、腰部がやや張って立ち上っている。口径は14.4cm、高さ5cmを測る。付高台は三日月形に外反し、やや低目である。調整は両面にロクロ痕が認められ、特に底部内面はロクロ痕が切りばなしである。4は土師器碗の底部破片である。付高台は外側に張る三日月形を成し、ロクロ目は1~3と同様である。5は4と同様土師器碗の底部である。底部は付高台で、三日月形に外側に張り出しを持っている。底部内側に(1~4)と同様なロクロ切り離し痕が残っている。6は高台付杯型土師器と思われる破片であり、灰褐色を呈している。高台は1.8cmと高く、外側に張り出している。底部内側にはロクロ痕が強く認められる。7は土師器無高台碗で、口径11.2cm、高さ3.7cmを有し、腰の張って立ち上る形態である。調整は外面にロクロ痕が目立ち、底部は糸切り痕が残っている。8は土師器無高台碗で、口径10.8cm、高さ3.5cmを測る。腰部は外側にわずかに張り出しながら口縁部に向かって立ち上る形態を持ち、底部に糸切り痕を認める。両面にロクロ痕がある。9は土師器無高台碗で、口径10.9cm、高さ3.4cm。両面にロクロ痕が認められ、底部は糸切り痕が残っている。10は無高台土師器碗で、口径10cm、高さ3.5cmを測る。腰部は張り出しながら立ち上がり、両面にロクロ痕が残る。11は土師器甕の底部破片であり、輪横痕が認められるが、調整は良くない。

第11図の12は灰釉陶器深碗の底部で、高台の立ち上がりは外側は直に近く、端部は三角形を成す付高台である。外面に袖の垂痕が認められるくらいで施釉状態は明らかでない。内面は刷塗りであるが、底部は無釉である。13は灰釉陶器碗で、口径14.6cm、高さ4.7cmを測る。形態は腰部が張り、口縁に向かって直線状に立ち上がっている。施釉は刷り仕上。底部の付高台は三日月形を成す。14は土師器耳皿で、底部に糸切り痕が残り、粗雑な調整である。

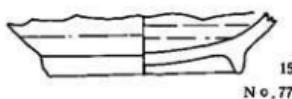
15は灰釉陶器付高台碗であり、三日月形の底い高台である。底部以外の内面は施釉されているが、外面は口縁部を欠損しているので施釉方法は不明となってくる。産地は灰白色の胎土から見て東濃方面と考えられる。



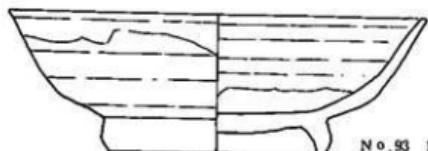
第10圖 第2號住居址出土遺物測量圖 (1 : 2)



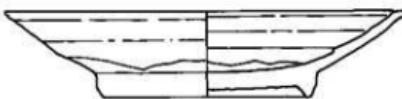
No. 7-12



No. 77-15



No. 93-13



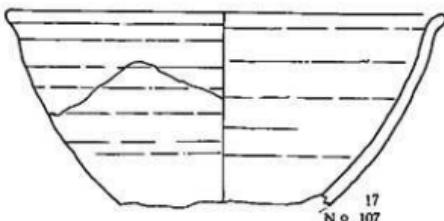
No. 101-16



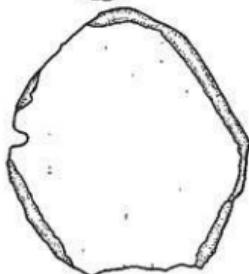
No. 14



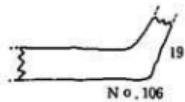
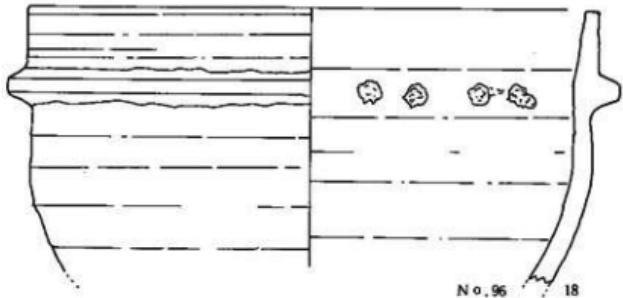
No. 99



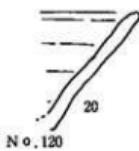
No. 107-17



No. 96



No. 106-19



No. 120-20

第11圖 第2号住居址出土遺物実測図(1:2)

16は灰釉陶器段皿で、口径14cm、高さ3cmを測る。瀬戸編年で折戸53号窯期第3段階ではヘラをあてて段をつくり出しているのが特徴である。従って本遺物は折戸窯中期頃と考えられる。高台部分に施釉され、底部は無施釉である。17は灰釉陶器深碗で、腰部が張った立ち上がりで、口縁部がやや外反する形態を成しているところは折戸53号窯分類の第3段階期と考えられる。両面とも刷塗施釉である。

18は土師器鉢釜で、口径15cmを測るが、底部を欠いているので、高さは測定できない。外面は調整痕の跡が認められ、口縁部はナゼによる痕が見受けられる。

19は土師器底底部破片であり、器面は灰褐色を呈し、調整は粗雑の方に含まれる。焼成はあまり良好ではない。

20は須恵器無高台碗と考えられる。器内、外面ともに調整時のロクロ痕が明瞭に認められ、製作工程が理解できよう。(友野良一)

第3号住居址(第12図 図版3 5)

本址は発掘調査東側、山林地帯、第1号住居址の東方約140mの位置で、現道の南側に発見された。テフラ層面を掘り込んで築いた竪穴住居址で、現存している南東、北西の二つの隅からして、平面プランは隅丸方形を呈する。

規模は南北の北側が現道下に入ってしまっていて調査不能であり、正確なる数値はのぞめないが、東西規模に近似しているであろう。ちなみに東西の規模は5m30cm位を測定できる。壁高は30cm前後とやや低く、垂直に近く、堅くしまっていた。床面は全面に堅い叩きを呈し、ほぼ水平状を成していた。

柱穴はP₂、P₃が等間隔に配置され、この状況より全部調査をすれば4本主柱穴と成り得る。P₁、P₄は柱穴とは考えにくい。カマドは東壁中央部付近に発見された。石組粘土カマドであるが、大部分が道路敷下に入ってしまっていて、一部分の調査しか実施できなかった。その結果として実態、規模は掌握できなかったが粘土の貼り付けは良好であった。

本址は遺物からして平安時代後期の住居址と考えられる。(飯塚政美)

遺物(第13図 図版9)

1は須恵器無高台碗である。

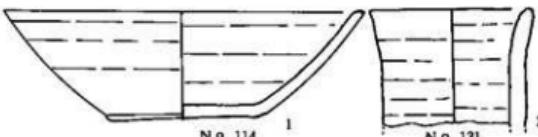
大きさは口径12.4cm、高さ

4.4cmを測る。色調は灰黒色。

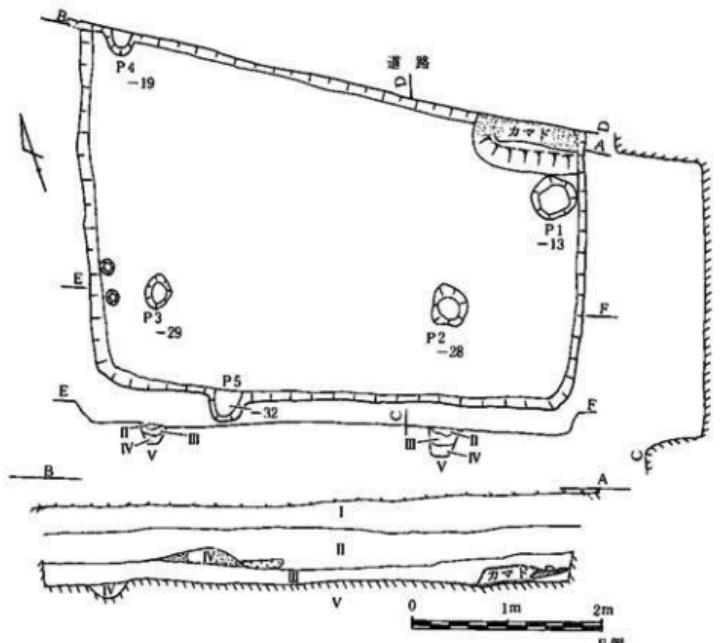
器面内外共に調整のロクロ痕

が認められる。底部に糸切痕
が残る。2は須恵器長頸瓶の

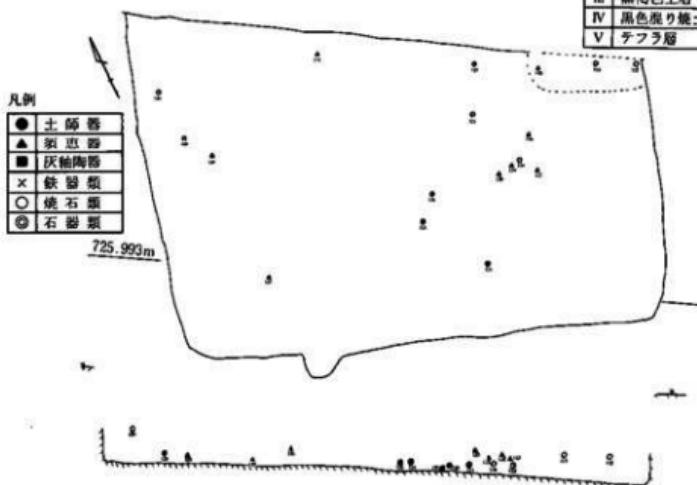
一部と考えられるもの。口径は5.7cmを測るが、高さは明らかでない。色調は灰黒色である。器面内外にはロクロ目の調整痕が認められ、焼成は良好である。時期は折戸53号窯期前半頃の製作と考えられる。(友野良一)



第13図 第3号住居址出土遺物実測図(1:2)



凡例	
●	土器
▲	須恵器
■	灰釉陶器
×	鐵器類
○	焼石
◎	石器類



第12図 第3号住居址実測図（上）及び遺物分布図（下）

第4号住居址（第14～15図 図版3 5）

本址は第3号住居址の東側に近接して発見され、表土面より80cm位下ったテフラ層を掘り込んで構築し、隅丸方形の平面プランを呈する竪穴住居址である。規模は東西7m10cm、南北は北側が現道のため調査はできない状況下である。しかし、南北の規模は住居址の形態からみて東西規模の近似値を示すと思われる。

壁高は高く、50cm位の数値を示していた。この状態は垂直に近く、堅くしまっていた。

柱穴は4本発見された。北側を発掘調査して全面を出せば8本の柱穴が出てくることであろう。P₁、P₂は主柱穴となり、直径45cm位、深さは50cm～65cmを測る。さらにP₁、P₂の間隔は2.8mで、約9尺のきちんとした数値を成している。P₄、P₅は母屋柱の柱穴と考えられる。

床面は大般水平で、堅くより踏み固められ、良好な叩きとなっていた。西壁南半分から南壁全体にかけて、壁面直下に幅10cm位、深さ10～20cm位の間溝が見事に配されており、住居址としての形態を整えていた。

カマドは東壁中央部に検出され、石組粘土カマド形態を成していたが、大部分は道路敷下になってしまっているため、その全体はつかめない。須恵器碗2点、土師器碗1点が出土している。これら3点の外面に「王」字の墨書きが明瞭に書かれている。よって本址は平安時代後期の住居址と思われる。（飯塚政美）

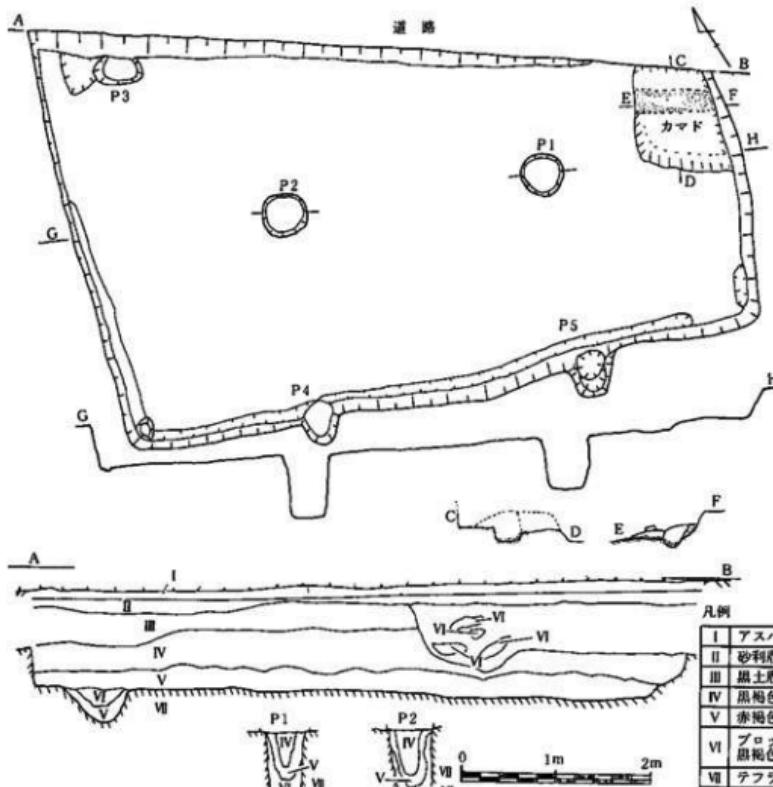
遺物（第16図 図版9～10）

1は土師器無高台碗で、口径約8.8cm、高さ2.5cmを測る。腰部の張りが少なく、口縁はわずか弯曲しながら立ち上がる形である。外面は赤褐色を、内面は内黒をそれぞれ呈している。外面に「王」字の墨書きが書かれ、その内容は次の通りである。墨書きの横は1.7cm、縦は1.5cm、文字の太さは2.0mm～2.2mm大である。

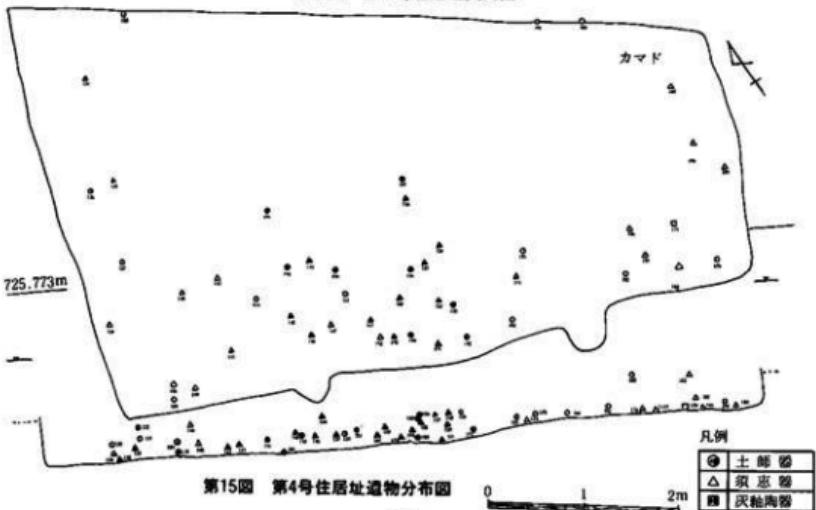
2は須恵器無高台碗で、口径13.7cm、高さ3.9cmを測る。腰部の張りはわずかであるが内側に弯曲しながら立ち上がる形である。器は回転によるロクロ痕が強く残る方法で製作され、色調は灰褐色を呈している。底部は片寄りに切りはなす糸切り痕を認め、胎土中にやや大型の長石粒が含まれている。墨書きを外面体部に「王」字を書いている。字体は縦1.1cm、横1.4cm、字の太さは2mm程度である。

3は須恵器無高台碗であり、口径12.3cm、高さ3.7cmを測る。器面の色調は赤褐色を呈し、還元炎の影響を受けている。腰部でゆるく弯曲しながら口縁部に立ち上がる形を成している。底部は糸切り痕の跡を籠状工具で撫ぜ切って調整を施し、さらに両面には回転ロクロ痕を水引きで仕上げた調整方法をとっている。墨書きは外側の肩部にその大きさ縦1.0cm、横1.5cm、太さ1mm位の「王」の字を書いてある。

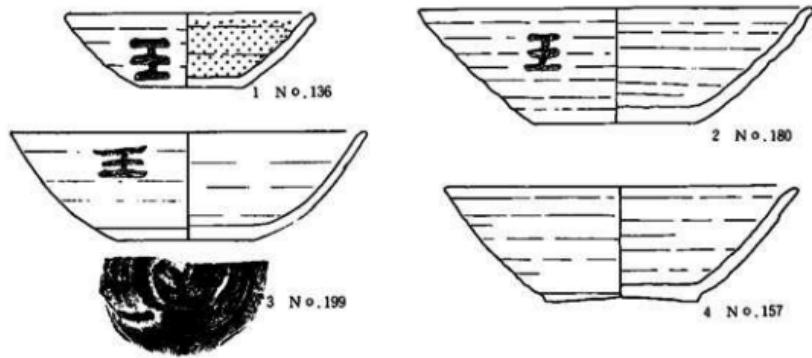
4は須恵器無高台碗で、わずかに腰部が張りながら、口縁部に向かって少し弯曲しながら立ち上がる形である。口径12.3cm、高さ3.8cmを測る。器の調整は回転ロクロ目の痕が、そのままの形で、底部は糸切り痕が片寄りの形でそれぞれ残っている。（友野良一）



第14図 第4号住居址実測図



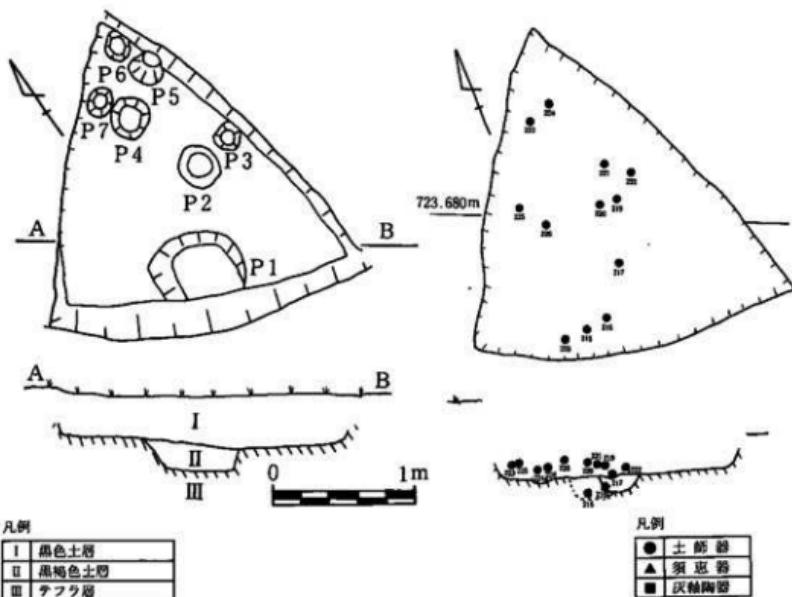
第15図 第4号住居址遺物分布図



第16図 第4号住居址出土遺物実測図(1:2)

第5号住居址（第17図 図版4）

本址は発掘調査地区東側、現道の北側である山林地帯に検出された。検出された地点は西側は墓地、南側は現道にはばまれ、住居址全体の四分一程度の調査しかできなかった。前述した諸条件によって規模及びプランは不明となっている。想定するに出土遺物からプランは隅丸方



第17図 第5号住居址実測図(右)及び遺物分布図(左)

形状と思われる。

表土面より35cm位下った
テフラ層面を掘り込んで構
築した竪穴住居址である。

壁高は北側だけがわかり
その高さは40cm位であった。
その状態は外傾気味で、軟
弱な為、崩落しやすかった。

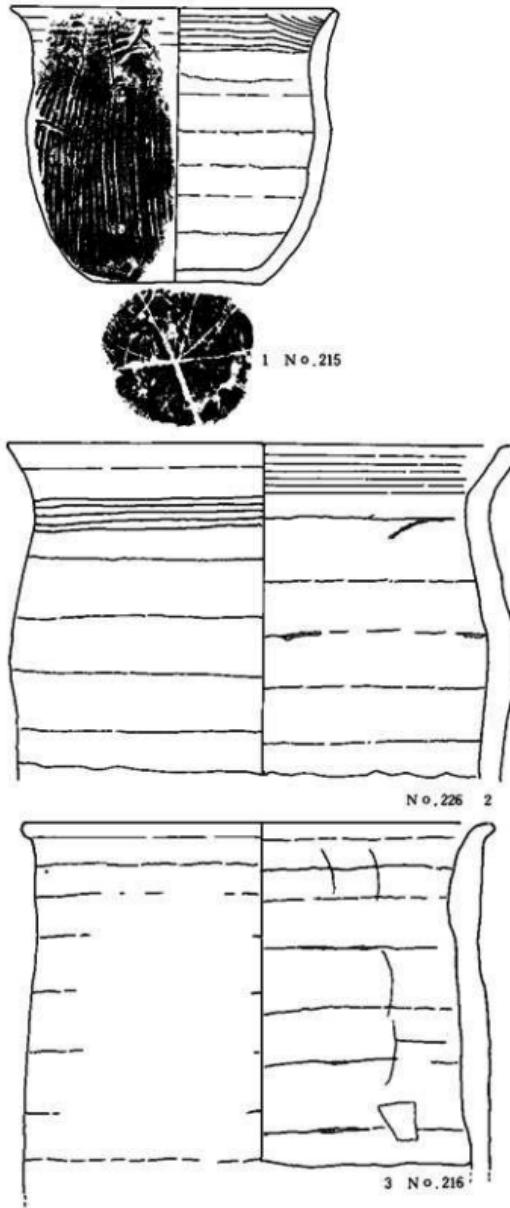
ピットは7本検出された
が、全体のプランが把握で
きないので、どれが主柱穴
となり得るかは現時点では
判断できない。

床面は凹凸が顕著であり
堅い叩きがところどころで
剥落していた。

カマドの位置も全体の調
査が進まなければ不明であ
る。出土遺物からみて平安
時代後期の住居址と考えら
れる。(飯塚政美)

遺物 (第18図 図版9)

1は土師器小型甌で、口
縁11.5cm、高さ9.5cmを測る
腰部の張りから胴部の張り
が最大となり頸部がくびれ
て、口縁が外反する形態と
なる。胴部から頸部にかけ
てカキ目文が縱位に走って
いる。一方、口縁部内側に
柳目文が横位状に施され、
文様変化に工夫をこらして
いる。その他、内面に輪積
痕が残り、底部には木葉痕



第18図 第5号住居址出土遺物実測図(1:2)

が認められた。

2は口縁径18cm、高さは不明であるが全般的にみて土師器の姿であり、胸部外面には輪積痕が認められる粗製土器である。

3は口縁径16.5cmを測る土師器甕型土器である。胴部内・外面には輪積痕が残り、調整が雑であった。外面に黒煙が付着していたり、長石粒や金管母が胎土中に多量に含まれている。(友野良一)

第6号住居址 (第19図 図版4~5)

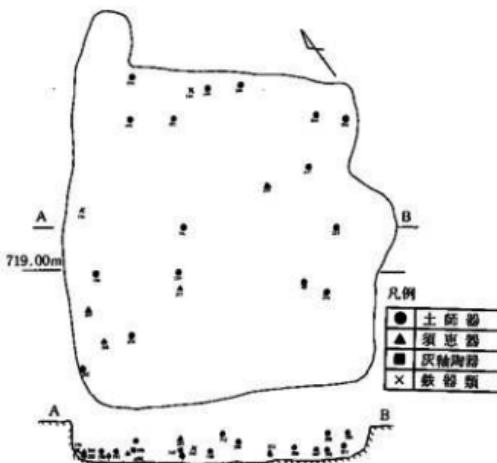
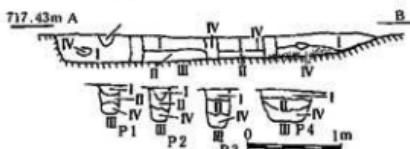
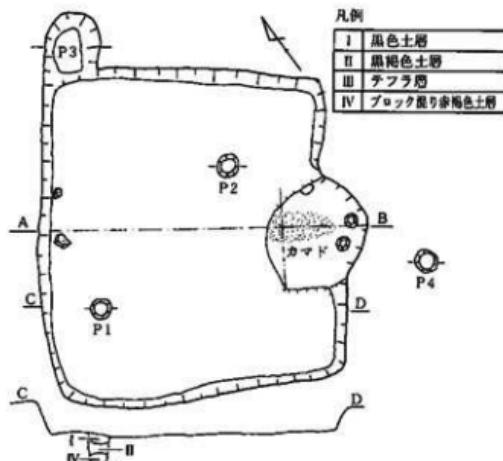
本址は第2号住居址から西側へ20m位の位置で、道路南側に検出された。地表面より50cm位下ったテフラ層を掘り込んで構築し、平面プランは隅丸方形状の竪穴住居址である。

規模は南北3m30cm位、東西3m位を測る。

壁高は西で35cm位、東で25cm位を測定でき、やや外傾気味を呈している。床面は大般平坦であったが、堅い叩きと軟弱部分が明瞭であった。この事実は後世、長芋作りに使用したトレッチャーワークが南北に数条、網状文様の如く走っていた。

柱穴はP₁、P₂は確実である。P₄、P₃は本址に関連したものかは明確ではない。

カマドは東壁のはば中程に構築された石組粘土カマドであり、粘土



第19図 第6号住居址実測図(上)及び遺物分布図(下)

の貼り付けは良好であったとみて
残存状態は良好であった。

出土遺物より見て本址は平安時代
後期と考えられる。遺物に鉄製刀子
の出土があった。

遺物（第20図 図版9-11）

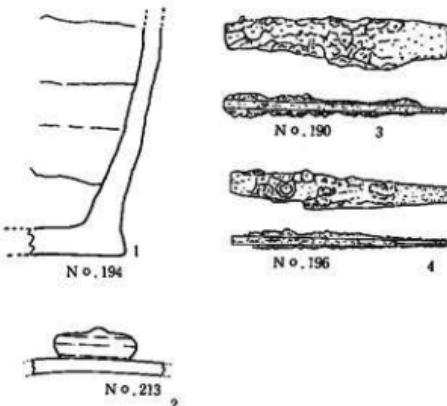
1は土師器縦型土器の底部である。
小破片のため計測は不可能であった
腰部から胴部の張りが少ない立ち上
がりの土器と考えら、器内・外面に
輪積の痕が見られ、粗製造りであつ
た。

2は須恵器蓋のつまみ部分であり
頂部は割合に平坦となっている。

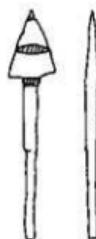
3～4は鉄製の刀子破片である。双方とも錆びの進行度が顕著である。

（2）その他の遺物（第21図 図版11）

今回の調査で出土した鉄鎌について、その概要を記してみる。こ
の鉄鎌を型態分類すると三角形脇快無の類に属するものである。鎌
身では長さが^t2.2cm、下の幅が^t1.6cm、鎌身中央の厚みが^t3mm、刀の
部分は現況で1mmを測る。頭部では、幅6mm、厚さ3mm、頭部の長
さが^t2.5cmである。この鎌の茎の部分では長さ3cm、幅4mm、厚さ3
mmと小形の鎌である。この鎌は長年之間土中に埋もれていたので、
錆が甚だしいので、保存には十分考えなくてはならない。また、平
安時代後期の遺跡から出土したと言う事実から、今後鎌の研究上貴
重な存在となろう。（友野良一）



第20図 第6号住居址出土遺物実測図（1:2）



第21図 鉄鎌実測図
(1:2)

第Ⅳ章 所 見

辻西幅道路の発掘調査は、県道美郷・箕輪線拡幅工事事業に伴う埋蔵文化財の記録保存による緊急発掘調査である。本報告書は平成6年度内に刊行する義務があり、従って実測図及び図版を主に報告し、考察は後日にゆることとした。本報告書をまとめるにあたって、調査中に知り得た問題を極く簡潔に記して所見としたい。

1. 辻西幅道路は辻集落東はずれの台地状地形面にかなり広範囲にわたって存在しているが、今回の調査は極く限られた地区であったため、6軒の住居址が検出されたにもかかわらず、その全体像が掌握できたのは第6号住居址1軒だけであった。

2. 調査の結果、平安時代後期竪穴住居址6軒が検出され、その中から土師器、須恵器、灰釉陶器が相当量出土した。灰釉陶器に限ってみるとならば美濃系産が主であり、これによって住居の時代を決定した。

3. 住居址6軒は隅丸方形を呈すると思われ、全体像は把握できなかったが、それができれば石組粘土カマドを有していると考えられる。第4号住居址に眼ってみると、1辺7.1m位の規模を持ち、極めて大型化を呈している。

4. 道構に付随した遺物を道構ごとに列記しておく。第1号住居址は土師器、須恵器、灰釉陶器を出土した。主なものは須恵器無高台碗。第2号住居址は土師器、須恵器、灰釉陶器を相当量出土した。主なものは土師碗、高台付土師器坏、土師器無高台碗、土師器耳皿、土師器甕、須恵器無高台碗、灰釉陶器深碗、灰釉陶器付高台碗。第3号住居址は土師器、須恵器が少量出土した。主なものは須恵器無高台碗、須恵器長頸瓶。第4号住居址は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土した。主なものは土師器無高台碗、須恵器無高台碗、これらの碗の外面に墨書きが書かれており、詳細については後述する。第5号住居址の主な出土遺物は土師器小型甕、土師器甕。第6号住居址の主な出土遺物は土師器甕、須恵器蓋のつまみ部、刀子である。

次に第4号住居址から出土した墨書き土器について触れてみる。これはカマドのすぐ近くより正位の状態で出土した完型の須恵器無高台碗2点、土師器無高台碗1点であり、いずれも外面に「王」の墨書きが明瞭に書かれていた。「王」は「大王」(天皇)などの表記に使用され、「公」、「君」と同意語に考えられている。敬称、あるいは位に付けたのか確實なところはわからないが、第4号住居址の規模と考え合わせてみると、集落の統率者クラスの人が住んでいた手掛かりになると想定できよう。本住居址はやや微高地にあり、統率者が高台に居を構える古代集落パターンに酷似していると思われる。

最後に、現在までに伊那市地域内から出土した墨書き土器について簡潔に記し、所見の総括とする。伊那市内で確認された資料は51例に達している。これらは発掘調査に伴う出土であり、研究を追求する上で、資料的価値は極めて高い。墨書き土器の基礎的論考を展開していくには、各種方面からの研究を重ねていく必要性があろう。

墨書き土器を出土した市内の遺跡名と所在地を記すところの通りである。

- ・御殿場遺跡（伊那市富県北福地）・根本谷中畑遺跡（伊那市富県北福地根本谷）・芝王遺跡（伊那市富県北新）・和手遺跡（伊那市西春近源訪形）・菖蒲沢遺跡（伊那市西春近源訪形）
- ・山本田代遺跡（伊那市西春近山本）・砂場遺跡（伊那市手良中坪）・福島遺跡（伊那市福島）
- ・上ノ山遺跡（伊那市西町）

次に51例を統計的に論を進めてみる。

遺構の種類及び時代決定－51例出土した遺構を機能的に細分化すると竪穴住居址20軒、柱穴址1棟であり、これらは全て平安時代に該当し、墨書き土器の上伊那への普及は平安時代に入つて開始され、平安時代中期頃に隆盛期を迎える傾向にある。今後、出土資料の細分化が進めば進む程、時代の細分化が可能となってくる。1つの遺構内からの出土例は、一個体出土のものから、山本田代遺跡第1号住居址の12個体出土のようなものと、出土個体数に多少のバラツキがあったが、全般的にみて、墨書き土器を出土した住居址は、その遺跡内の中心部分に存在する傾向にあり、その規模も大きく、金属製品等特殊な出土品が目立っている。

器の種別－出土例51点のうち、土師器が43点、須恵器7点、灰釉陶器1点と極めて極端な数値を示している。須恵器、灰釉陶器類は全てと言ってよい程に生産地が特定され、移入されたものであるのに対し、土師器は地元産であったために、このような数的差が生じたのであろう。

器の器形－51点のうち、碗型5個、細片のため器形不詳1個、高台付环2個、杯43個で全体の9割を杯が占有している状況である。ところで、土師器や須恵器の杯・碗は、日常生活必需品として用いられている器であって、無文で形が同じような姿をしていて、いわば自他を区別するための表示が当然に必要となってくる。このような際に墨書きの有無はこのうえない指標となろう。高台付杯は供膳用具の最も代表的なものであった。墨書きを印した器は内黒や糸切り底が極端に多くなっており、これも目印の一つになっているのであろうか。

墨書きが印された部位は外面だけのもの19個、底部だけのもの25個、外面と底部の双方にあるもの7個、字体を逆位に付けたもの6と数値的に分類できる。この置き方、利用状況によっての一工夫ではなかろうか。墨書きの判読可能なものは10数例見うけられるが、これらを列記し、その意味するところを推察してみる。

- ・大きさを表示するものとして「大」の字が4カ所
- ・数字を表すものとして「十」の字が2カ所、「六」の字が1カ所
- ・方位を表すものとして「子」の字が1カ所、「西」の字が1カ所
- ・吉祥を意味するものとして「信」の字が2カ所
- ・地形・地物を表すものとして「田」の字が1カ所
- ・仏教に関する寺の記号として「卍」が1カ所
- ・「太」の墨書き土器は山本田代遺跡より出土しており、水田地帯「田代」の地名に関連する「T A」の音の表記と考察する見解もある。（註1）

なお、判読できないものが多数あるが、今後の資料増加に伴って読めるようになる可能性は極めて高いと思われる。

墨書き土器を出土した遺跡の歴史的背景－このことについては平安時代に限って述べる。御殿場遺跡、芝王遺跡、根木谷中畠遺跡は、地域的に見て『倭名抄』に記載されている「福智郷」の一帯に位置している。和手・菖蒲沢遺跡は上伊那郡宮田村と接している。現在、陽明文庫に保存されている『知信記』裏文書の保延二年（1136）4月17日の項に「宮田平家基」の解状が存在している。この文書の初めに「口濃國宮田村司散位平朝臣家基解申請国裁事」と記述されている。冒頭の文字は次字になっており、美濃國か信濃國かで論議を呼んだが、文書の記述内容からして信濃國が妥当という結論に達し、信濃國に決定した神戸大学教授戸田芳実氏は、この文体記述は国衙領に含まれている地域だと断定し、古代の宮田周辺は国衙領の一部だったとしている。（註2）この説をふまえてみると、和手・菖蒲沢遺跡は国衙領の一部に位置していると想定され得る。

山本田代遺跡の東方200m程の所に北条遺跡があり、この遺跡より須恵質円面鏡の出土が御子柴泰正氏によって、（註3）また、小黒川、小沢川を越えた高台に月見松遺跡が存在し、同遺跡の住居址内より石器出土がそれぞれ報告されている。（註4）山本田代遺跡・月見松遺跡・上ノ山遺跡周辺は古くより『倭名抄』の一郷「小村郷」に該当すると思定されているが、研究者によつては否定的な見方もある。

福島遺跡は多量の墨書き土器を出土した。これらに伴出して高貴なガラス玉、腰帶金具類が出土し、集落内に「衣冠束帶」に身を飾した識者の居住を実証するものである。この福島遺跡と辻西幅遺跡一帯は、『倭名抄』に記載されている「豆良郷」、「延喜式」に見られる「笠原牧」の範囲に含まれていると定説化されている。以上からして、墨書き土器を出土する遺跡は確実に古代の宮都跡、国衙領、郡衙領、城柵、寺院、郷の範囲にそれぞれ含まれていることは間違いない事実であろう。

参考文献

- 註1 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一伊那市内その2一」（日本道路公团
名古屋建設局 長野県教育委員会 昭和48年度 1973年）の報告書の中で調査主任宮
沢恒之氏の説
- 註2 「宮田村誌」上巻 1986年
- 註3 御子柴泰正『伊那路』第20巻第6号 1971年
- 註4 飯塚政美『伊那路』第26巻第6号 1982年

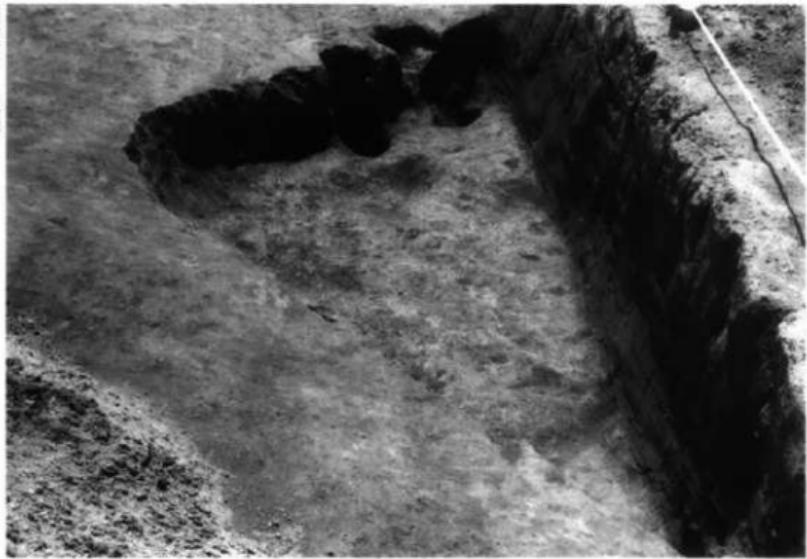
（飯塚政美）

図 版



遺跡地を北東側より眺む（上）

遺跡地を南側より眺む（下）



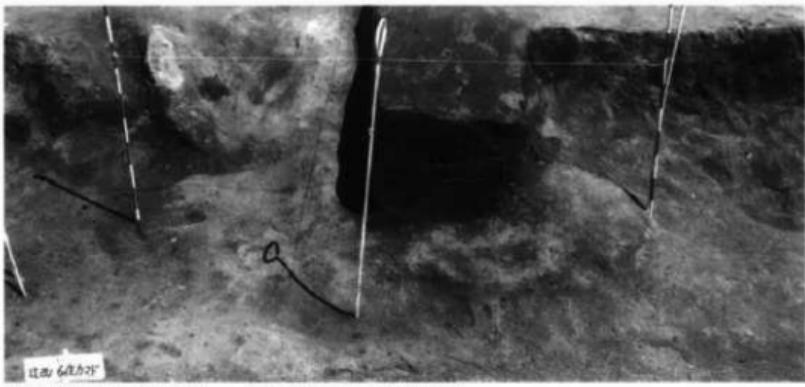
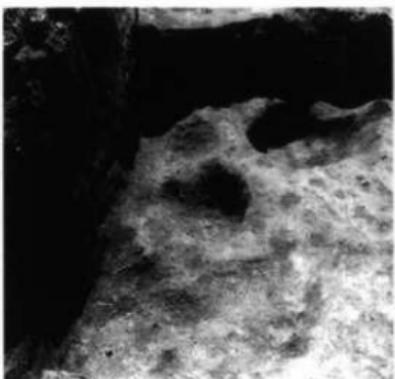
第1号住居址（上） 第2号住居址（下）



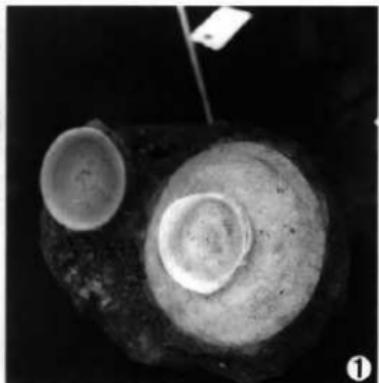
第3号住居址（上） 第4号住居址（下）



第5号住居址（上） 第6号住居址（下）



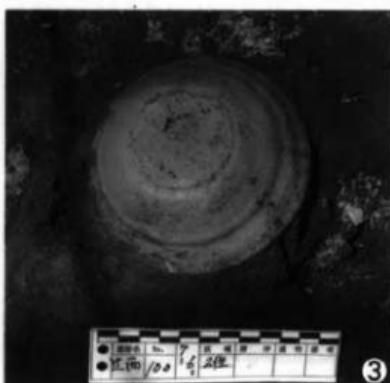
第2号住居址カマド（上） 第3号住居址カマド（中左）
第4号住居址カマド（中右） 第6号住居址カマド（下）



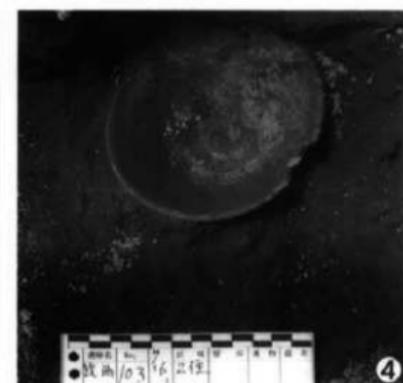
①



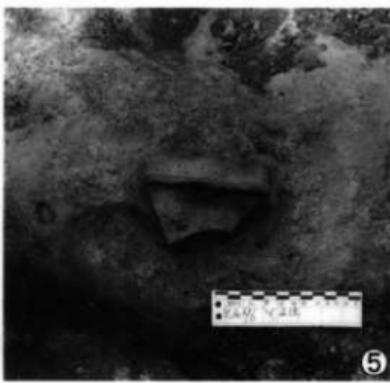
②



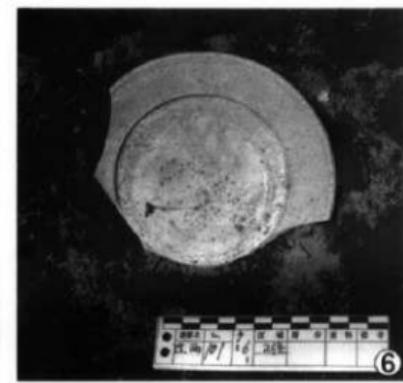
③



④



⑤

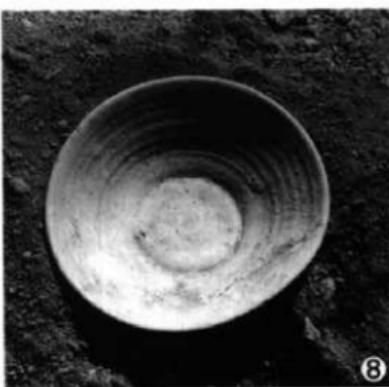


⑥

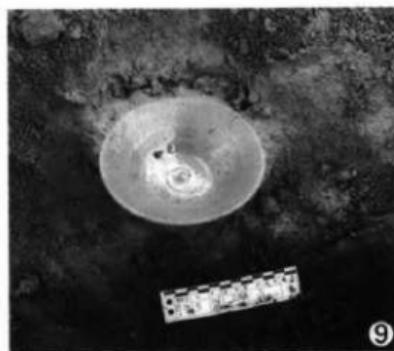
1 土師器 2 須惠器 3 土師器 4 土師器 5 土師器銅蓋 6 灰釉陶器



7



8



9



10



記念撮影

7 灰陶陶器 8 須恵器 9 土師器 10 鉄錠



土師器（第2号住居址No.3）



土師器（第2号住居址No.97）



土師器（第2号住居址No.103）



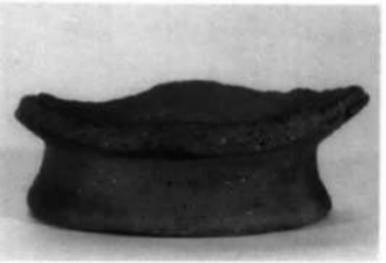
土師器（第2号住居址No.5）



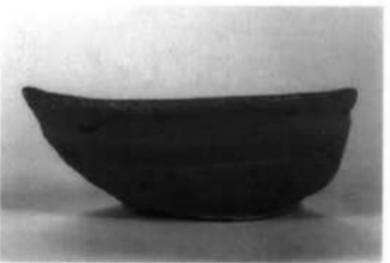
土師器（第2号住居址No.1）



土師器（第2号住居址No.100）



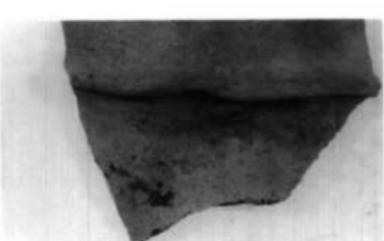
土師器（第2号住居址No.98）



土師器（第2号住居址No.6）



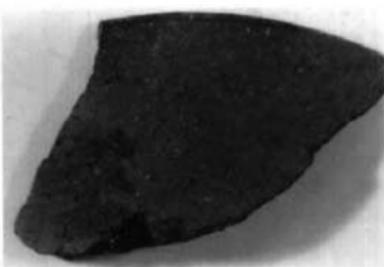
土師器（第2号住居址No.46）



土師器（第2号住居址No.96）



土師器（第2号住居址No.79）



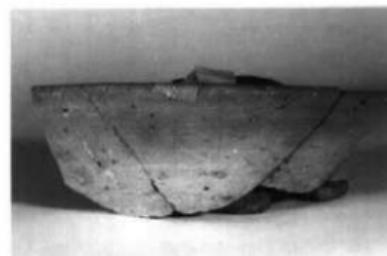
土師器（第4号住居址No.136墨書）



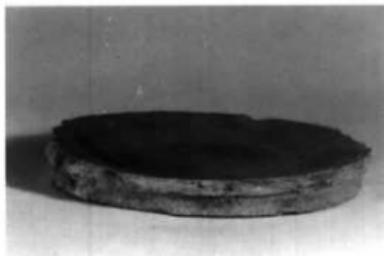
土師器（第5号住居址No.215）



土師器（第6号住居址No.194）



須恵器（第3号住居址No.114）



須恵器（第4号住居址No.149）



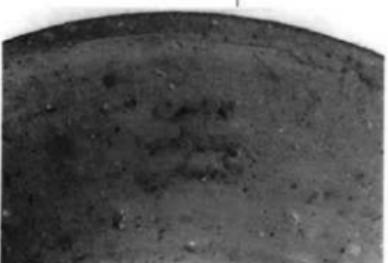
須惠器（第4号住居址No.199）



須惠器（第4号住居址No.180）



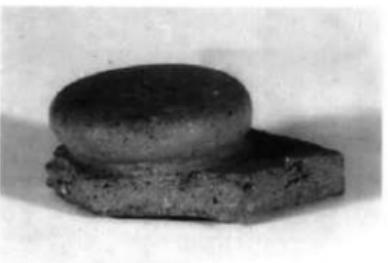
須惠器（第4号住居址No.199墨書き）



須惠器（第4号住居址No.180墨書き）



須惠器（第4号住居址No.157）



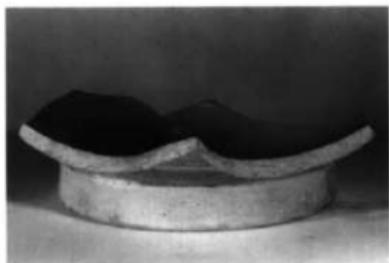
須惠器（第6号住居址No.213）



灰釉陶器（第2号住居址No.93）



灰釉陶器（第2号住居址No.101）



灰釉陶器（第2号住居址No.102）



灰釉陶器（第2号住居址No.2）



灰釉陶器（第2号住居址No.77）



灰釉陶器（第2号住居址No.7）



鉄盆（第2号住居址No.4）



刀子（第6号住居址No.190）



鉄鏃（トレンチ内）



刀子（第6号住居址No.196）

報告書抄録

ふりがな	つじにしほいせき						
書名	辻西幅遺跡						
副書名	県道美鷗・箕輪線拡幅工事事業						
卷次							
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書						
シリーズ番号							
編著者名	友野良一・飯塚政美						
編集機関	伊那市教育委員会						
所在地	〒396 長野県伊那市大字伊那部3050番地 Tel0265-78-4111						
発行年月日	西暦1995年3月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ...	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
つじにしほい 辻西幅	ながのけん いなし 長野県伊那市 てらさわおか 手良沢岡	163	2529	...	平成6年 7月1日～ 平成6年 7月22日	300	県道美鷗 箕輪線拡 幅工事事 業に伴う 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
辻西幅	集落址	平安時代	竪穴住居址6軒	土師器 須恵器 灰釉陶器 土師器墨書き 須恵器墨書き 鉄鎌1 刀子2	平安時代初期に編纂 された「倭名抄」に 見られる「豆良郷」 の一部か		

辻 西 幅 遺 跡

— 埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書 —

平成7年3月8日 印刷

平成7年3月10日 発行

発行所 伊那市教育委員会

印刷 小松総合印刷所

